

『名家拾葉集』の成立

三 村 晃 功

一 はじめに

筆者は近時、古典和歌を例歌（証歌）として収載する、近世期に成立した類題集の研究を進めているが、その近世期に成立をみた類題集の種類たるや種々様々で、一口にいえばまさに百花繚乱の様相を呈していると概観できようか。そのような多彩を極める近世類題集のなかで、筆者はこれまで多種多様な類題集の基礎的考察を手掛けてきたが、今回検討対象として俎上に載せたのは、これまで対象としてきた類題集とは多少、趣を異にする種類のものである。すなわち、収載する例歌（証歌）の時代的範囲も室町期の和歌から近世初期の和歌が大半を占めるうえに、形態的にも純然たる類題集というよりは私撰集の側面も多分に具有する種類のもので、言わば、類題私撰集とも呼称するのが妥当と憶測される撰集である。

1 その撰集とは『名家拾葉集』のことだが、本集は目下、版本で大阪市立大学学術情報総合センター森文庫に伝存

するのが唯一の伝本である。それは『私撰集伝本書目』（昭和五〇・一一、明治書院）に、

597 名家拾葉集

名家拾葉集 二 寛政一二刊 大阪市大森文庫

のごとく記述されているとおりだが、現在のところ、手許の目録類にも、森文庫以外の所蔵機関を見出しえないのが現状である。ただし、版本によって刊行された本集が、何故にこのような伝播状況であるのか、その明確な理由を目下、探索しえないけれども、そのような伝播状況を反映してか、不思議なことに、その研究史をたどる際に通常、参看する福井久蔵氏『大日本歌書綜覧上巻』（大正一五・八、国書刊行会）にも、その記事を見出すことができず、わずかに『和歌大辞典』（昭和六一・三、明治書院）に、

名家拾葉集^{えいしかふ}〔江戸期私撰集〕撰者未詳。寛政一二1800年刊。^{（大）}一冊。大阪市立大学森文庫蔵。作者には重

之・常縁・玄旨・貞辰・元就ら、先代、および当代の二条系歌人の詠歌を集め、四季・錢別・羈旅・哀傷・

恋・雑の各部立によって分類したもの。

（大取一馬）

のごとき記述がなされた記事を拾遺することができる程度である。その意味で、この大取氏の記述は本集の概略を簡単に紹介した記述でしかないが、貴重な言及として評価されるであろう。しかし、本集の種々様々な視点からの充分な本格的な考察は、今後の検討課題として残されていることも事実であろう。

そのようなわけで、本稿は、例によつての蕪雑な作業報告にすぎないが、従来辞典類以外にはほとんど言及されることのなかった『名家拾葉集』について、このたび、成立の問題を中心に据えて具体的に問題追究した拙い論考である。大方の厳しいご批評が得られるならば、幸甚に思う次第である。

二 書誌的概要

さて、『名家拾葉集』の伝本については、さきに触れたとおり、『私撰集伝本書目』（昭和五〇・一一、明治書院）の記述に見える、大阪市立大学附学術情報総合センター森文庫に伝存する寛政十二年刊行の版本が唯一のものと憶測されるので、この版本を底本として、まずは本集の書誌的概要に言及すれば、おおよそ次のとおりである。

なお、底本については、国文学研究資料館蔵のマイクロ・フィルムに依拠して調査したことを断っておきたいと思う。

国文学研究資料館蔵のマイクロ・フィルム番号 51・153/2 C7559

所蔵者 大阪市立大学学術情報総合センター森文庫 蔵 911・15/7MEI

編著者 未詳

体裁 大本（縦二六・一センチ、横一八・三センチ） 二冊 版本 袋綴じ

題 籤 名家和歌集

内 題 名家拾葉集卷之一（～卷之十二）

匡 郭 なし

各半葉 十二行（歌一首一行書き） 序九行

総丁数 六十三丁（上冊・二十九丁、下冊・三十四丁、遊紙Ⅱ上冊・一丁）

総歌数 六百四十五首（卷一春・百五首、卷二夏・七十五首、卷三秋・百二十四首、卷四冬・八十五首、卷五錢

別 羈旅・三十八首、卷六哀傷・二十二首、卷七恋上・二十七首、卷八恋下・三十九首、卷九雜上・六十一首、卷十雜下・三十七首、卷十一神祇・十七首、卷十二祝言・十五首）

柱 刻 なし

序 棟塙（寛政十二年十一月）

跋 なし

刊 記 寛政十二年申十二月／二条通富小路東入／京都書林 吉田四郎右衛門／心齋橋通北久太郎町／浪華 原

喜兵衛

その他 ほ門／大六二二号／二冊ノ内／小竹園文庫（表紙ラベル） 911／MEI／森文庫（同）

以上から、本集は春百五首、夏七十五首、秋百二十四首、冬八十五首、錢別・羈旅三十八首、哀傷二十二首、恋上二十七首、恋下三十九首、雜上六十一首、雜下三十七首、神祇十七首、祝言十五首の、都合六百四十五首を収載する小規模の類題私撰集と知られよう。

三 歌題の問題

さて、本集が類題集としても、私撰集としても、かなり小規模の撰集である点については、以上の記述からほぼ明確になったと思われるが、もう少しこの点について言及しておきたいと思う。

まず、本集が類題集としての側面をもつと判断した理由は、巻五の恋下部のほとんどが「寄く恋」題であるうえに、たとえば巻一の春部の「梅」関係の歌題をみると、「霞中梅」「田家梅」「梅風を」「檐梅」「宿梅」「夕梅」「梅薫風」「梅薫遠」（二七～三四）のとおりに、類題集の歌題配列基準に則って配列がなされている実態である。

一方、私撰集としての側面をもつと判断した理由は、巻五の錢別・羈旅および巻六の哀傷の各部が、ほぼ勅撰集と同様の詞書をもち、そのほとんどが実詠歌であることと、たとえば、類題集のごとき体裁をもつ巻一の春部の中

にも、「春の比、山ざとにて月を見て」（四二）や「花見にまかりて、漸く暮方になり、人々哥よみけるに」（六〇）の例に見られるごとき、勅撰集の詞書に類する記述が見られる実態などである。

そこで、本集はいかなる歌題を収録しているかの問題について、私撰集のごとき詞書や「題しらず」「春の哥に」などの一般化された詞書の事例などを除外して、本集が収録する歌題のすべてを、部立別に列挙してみると、およそ次のごとくなる。ただし、勅撰集を想起させる詞書のなかに歌題の明示がある場合、それは掲げることにした。

春部

春立心を・春のはじめに・湖上立春・橋霞・山霞・海辺霞・子日を・うぐひすを・朝鶯・隔霞聞鶯・谷鶯・雪中鶯・霞中梅・田家梅・梅風を・檐梅・宿梅・夕梅・梅薫風・梅薫遠・水辺春望・若木梅を・柳の哥に・行路柳・春月を・幽栖春月・春山曙・磯春草・初花を・山花・故郷花・行路花・朝花・夜思花・依花待人・翫花・名所花を・花柳交枝・松間花・柳先花緑・山花・落花の哥とて・花下忘帰・花時心不静・山落花・山花埋路・花落客稀・帰鴈・帰鴈消雲・天外遊糸を・庵春雨・苗代を・早蕨・夕莖菜・杜若を・蛙の哥に・牡丹・やまぶき・川山吹・岸山吹を・松下躑躅・藤の哥に・路辺藤・暮春の哥に・暮春花を・三月尽・閏三月尽

夏部

更衣・首夏朝・送春如昨日・尋余花・雨中木繁・久待子規・待郭公・聞郭公・杜郭公を・郭公頻・雨中郭公・郭公幽・暁子規・子規稀・卯花を・夕卯花・葵を・五月五日・夜廬橘・軒廬橘・五月雨を・五月雨久・橋五月雨・沼五月雨・夏地儀・夏草・野夏草・なでしこ・夕顔・夕立・鶉川・雨後鶉川を・月添涼氣・蟬声送風・雨後蟬・蟬声近秋・水辺螢・叢螢・池辺螢・扇を・納涼・江納涼・松陰避暑・六月祓

秋部

秋のはじめに・初秋風・山家秋来・初秋露・初秋風・閑居秋風を・待七夕・二星適逢・七夕橘・七夕霧・乞巧

奠・袖上露・露の哥とて・萩を・庭萩風・閑居萩・岡荳萱・風前薄を・女郎花・秋夕を・河月・行路月を・湖
 月・月前遠情・仲秋に・明月如昼・海辺月・湖上月・嶋月・江月・閑路月・橋上月・月為友・月照滝水・月漸
 傾・河月似氷・稻妻・九月九日に・菊交薄・籬下虫・きりくすを・夕虫・月前虫・鴈・暮山鴈・月前鴈・月
 前擣衣・聞擣衣・深更擣衣・里擣衣・旅宿擣衣・原鹿・旅宿鹿・暮秋鹿・田家鳴・野亭鶉・故鄉鶉・風前鶉・
 麓鶉を・紅葉の哥とて・紅葉添雨・蔦掛松・閑路紅葉・暮秋の哥に・暮秋夕・鐘声送秋

冬部

冬のはじめに・杜落葉・深夜時雨を・谷時雨・時雨知時・遠村時雨・原寒草・枯野・嵐吹寒草・枯野眺望・橋
 上朝霜・水郷寒芦・浦寒芦・冬浦月・あじろを・網代寒・氷始結・千鳥を・浜千鳥・浦千鳥・湖上千鳥・暁千
 鳥・笹霰を・初雪を・夜思山雪・松雪・閑中雪・雪待人・閑路雪・塩屋雪・雪中竹を・雪のあしたに・野雪・
 夜神樂・野鷹狩・埋火・炭竈を・遠炭竈・歳暮雪を・年のくれに・歳暮思旧隠・年欲暮・老後歳暮・除夜に

錢別・羈旅部

美保・閑路夕・旅宿月・月前旅行・さよの中山・旅行・雪中旅行・海辺旅宿・秋旅行・羈中野・雪中旅人を

哀傷部

無常の哥とて・哀傷の哥に

恋上部

初恋・見恋を・互忍恋・忍久恋・析恋を・疑行末恋・泊遊女・通書恋・身をかへり見て・行末を契るの心を

恋下部

寄月恋・寄雨恋・寄雲恋・寄閑恋・寄橋恋・寄山恋・寄煙恋・寄衛恋・寄獸恋・寄鏡恋・寄弓恋・寄筵恋・寄
 忍草恋・寄草恋・寄木恋・寄杉恋・寄鴛恋・寄枕恋を・寄櫛恋・寄玉恋・寄糸恋・たはれ女に別るゝの心を・

寄山恋・寄書恋・祈神恋

雑上部

歳内立春・海辺霞・霞隔浦・雪中若菜・春のはじめに・雲雀を・横雲鴈・柳の哥に・蚊遣火を・垣夕顔・年内梅を・暁鷄・暁を・山家松・山家水・山家嵐・山亭人稀・閑居・田家煙・田家路・田家翁・田家雨・田家鳥・故郷庭・故郷草を・軒忍草・窓竹を・窓燈・暁遠情・水草隔舟・晚鐘・古寺鐘・夢

雑下部

雲鎖澗口・名所泊・浦漁舟・遠帆連波・湖上舟・谷樵夫・夕樵夫・被書忍昔・被書思昔・寄獸雜を・述懷・老述懷・風破暁夢

神祇部

社頭榊・社頭月・社頭燈・社頭榊・神祇哥とて・社頭松

祝言部

花契千年・春祝・菊契多秋・祝のうたに・寄道祝・松久緑・松延齡友・湖亭催興

以上、煩を厭わず、本集に収載する歌題およびそれに類するものを、部立別に掲げてみたが、恋下部や錢別・羈旅部、哀傷部などに多少偏りが指摘されるものの、大半は通常の類題集に見られるごとき歌題が満遍なく配列されているようだ。

ちなみに、『堀河百首』の春部二十首の歌題を掲げてみると、

立春・子日・霞・鶯・若菜・残雪・梅・柳・早蕨・桜・春雨・春駒・帰雁・喚子鳥・苗代・堇菜・杜若・藤・款冬・三月尽

のとおりだが、これを本集の春部の歌題と比較すると、本集は若菜・残雪・春駒・喚子鳥の四題を収録していない

ことが明白になる。

一方、歌題解説書『和歌題林抄』の夏の歌題二十三題を次に掲載すると、

更衣・卯花・余花・葵・時鳥・結葉・菖蒲・早苗・照射・鵜河・五月雨・廬橘・瞿麦・螢火・水鶏・蚊遣火・
夏草・蓮・蟬・氷室・納涼・泉・荒和祓

のごとくだが、これを本集の夏部の歌題と比較を試みると、本集は結葉・照射・水鶏・蚊遣火・蓮・氷室・泉の七題を欠いている実態が知られる。

以上、春部・夏部の二部立に限っての歌題収録状況の検討ではあったが、百首歌と歌題集成書のモデルである、『堀河百首』『和歌題林抄』と本集のそれとの比較を試みたところ、本集の一部に未収録の歌題が存することが確認されたわけである。この点、本集の編者の未熟な編纂姿勢を認めざるを得ないと評しえようが、しかし、本集の例歌の配列を精査してみると、本集には、意外に編者の編集面での行き届いた配慮が認められるようだ。たとえば、春部から、いくつかの歌群を引用してみると、次のとおりである。

若木梅

玄旨

1 いかにして昔のかには匂ふらんうえし若木の梅のはつ花

(春・三六)

題しらず

方円

2 玉嶋や梅が、きそふ春風にこの川上とたれしたふらん

(同・三七)

春の哥とて

忠圃

3 庭の面はまだふるとしの色ながらはつかに見ゆる雪の下草

(同・三八)

柳の哥に

元就

4 青柳の糸くり返すそのかみはたがをだ巻のはじめ成らん

(同・三九)

行路柳

多門氏女

5 玉ぼこの道行人もくり返し春をぞしたふ青柳の糸

(同・四〇)

題しらず

よみ人しらず

6 吹みだす風の姿も見ゆるまでかづらき山になびく青柳

(同・四一)

春の比、山ざとにて月を見て

7 さゆるよの空だに月のかすまは春ともいさやみねの白雪

(同・四二)

春月を

宗祇

8 霞む夜をならひときけば老が身のなぐさむ月は春のみや見ん

(同・四三)

幽栖春月

よみ人しらず

9 今は身のすむともなしの宿の月うき世にもれてかすまは春のみや見ん

(同・四四)

春山曙

直昌

10 をしなべて空に霞はたつた山まだ花ならぬ春の明ぼの

(同・四五)

磯春草

重時

11 日にそひて磯の若草うすくこく緑ふかむる春雨の空

(同・四六)

春の哥に

勝敵

12 過行もやすき習の春とだにしらず木末の花ぞまたる、

(同・四七)

常縁

13 つれもなき花に心をさきだて、いくたびか、る峯の白雲

(同・四八)

初花を

義一

14 咲添ん末の日数やこもりくのはつせの花の雲の一むら

(同・四九)

この1～14の歌群の歌題(詞書)表記をみると、1の「若木梅を」から14の「初花を」の題のなかに、「題しらず」(2・6)「春の哥とて(に)」(3・12・13)「春の比、山ざとにて月を見て」(7)のごとき、標準的な歌題とはいえない記述が見られるが、2の「題しらず」歌には、1の「若木梅を」の題に接続する「梅が、」の措辞を見出すことができ、それに続く3の「春の哥」には、「雪の下草」の措辞が『堀河百首』の「残雪」「若菜」の代替をしており、さらに6の「題しらず」の歌にも、前歌の「行路柳」に係る「青柳」の歌ことばが見られ、続く7の詠には、詞書の「…月を見て」からわかるように、「月」(堀河百首・和歌題林抄にはない)の歌群(9まで)へと進むが、歌には「白雪」の措辞が見られる。また、11は「磯春草」の題歌だが、「若菜」に代わる「若草」の措辞が見られ、続く12・13は「春の哥に」の題歌だが、14の「初花を」以下の「花」に係る歌題に接続する「花」の措辞を含んでいるのだ。

このように本集には、『堀河百首』の「若草」「残雪」の題は付されていないものの、詠作された和歌表現にそれに類する措辞がみられるのであって、これを一般化して言えば、本集は、明確な歌題表記を持たない詠歌の場合には、大袈裟に言えば、そこに編者の確固たる配列原理に基づいた、完結した美的空間を創造するための編集面での行き届いた配慮が認められるというわけだ。

この点を、夏部の事例を引いてさらに説明しておこうと思う。

五月五日によめる 友益

15 軒のみか五月の玉のひかりもて袖のあやめもわかれざりけり

(夏・一三二)

竹之

16 をしなべてけふのためしと宿ごとにあやめを軒のつまに引らし

(同・一三二)

十首哥の中に

眠鷗 越後住

17 おり立て山田の賤のわざながらけふも果なく早苗とるなり

(同・一三三)

百首の中に

沢庵

18 かぞふれば遠き日数と思へども早苗とる手に秋風ぞふく

(同・一三四)

多門氏女

19 雨はるゝ岡べの田面水こへて袖ほしあへず早苗とるなり

(同・一三五)

夜盧橘

勝敵

20 をりくゝの夢も昔にかへるやと植てしのぶの軒のたち花

(同・一三六)

題しらず

安昌

21 したへども立ばかへらずかほりくるはなたち花の遠きむかしを

(同・一三七)

隆鎮

22 風さそふ盧橘の袖の香にむかしをしのぶさよの手枕

(同・一三八)

この15・22の歌群の歌題(詞書)表記には、15・16の「五月五日によめる」、17の「十首哥の中に」、18・19の「百首の中に」、21・22の「題しらず」など、標準的な歌題とはいえない記述が見られるが、しかし、15・16の「五月五日によめる」の詞書を付した詠歌には、ともに「あやめ」の措辞があつて、直前の歌群(一二八―一三〇)に付された「葵を」の題に接続しており、17・18の「百首の中に」の詞書を付す詠歌にも「早苗」の措辞があつて、直前歌の「あやめ」の歌ことばに接続しながら、次の20の「夜盧橘」の題歌に連繫するというように、巧妙な和歌の配列がなされていて、この点は、次の21・22の「題しらず」歌にも「はなたち花」「盧橘」の歌ことばが見出されて、そこには編者の心にくいばかりの歌題配列原理に基づいた編纂上の配慮が窺知されるのだ。

ここには本集の属性の一つである私撰集としての側面が如実に認められ、本集の歌題（詞書）面での特徴を十二分に発揮しているといえるようだ。

四 詠歌作者の問題

以上、本集の歌題について、種々様々な視点から検討を加えてみたが、次に、本集に収載される詠歌作者について言及してみよう。

ところで、この問題を検討する前段階として、本集は、収載歌のすべてに作者表記を付していないので、作者表記のなされていない詠歌作者の決定が優先課題となるであろう。そこで、この問題を解決するために、玄旨（幽斎）と元政にかかわる歌群を組上に載せて、検討を加えてみたい。

愛宕山より月輪にまかりて（以下略）玄旨

23 きのふけふ秋くるからに日ぐらしの声うちそふる滝の白波

（秋・二〇二）

七夕七首会興業の時、「待七夕」の心を

24 燈も猶九重の雲の上に秋のなぬかの星まつるらん

（同・二〇二）

田辺にて会に、「二星適逢」と云事を

25 天の川遠きあふせを契てや二つのほしの中に落らん

（同・二〇三）

この23・25の三首の場合、23の詠には「玄旨」の作者表記が付せられているが、24・25の二首には作者注記は付せられていない。したがって、この三首の作者について調査してみると、いずれの詠も『衆妙集』（新編国歌家大観本）の三二三・三二四・三三八番に収載されているので、三首ともに玄旨の詠作と知られるのだ。

また、次に掲げる、

身延山へ詣ける時、関にて（以下略）元政

26 草枕夢やは見えんありし世の旅はたびともあらし吹夜に

（錢別驛旅・四〇五）

三河国矢矧の橋をわたるとて

27 憂世には又ひかれじと梓弓やはぎの橋にかきつけて見ん

（同・四〇六）

富士の山を見て

28 よしさらば中くくもれことのはの見てもおよばぬふじの高ねを

同・四〇七

29 それとみてあふげば空の朝なくいよくたかしふじの白雪

（同・四〇八）

むさしに暫侍りける時、探題「旅宿月」を

30 月も又こと、ひかはせずみだ川みやここひしきよ半の寢覚に

（同・四〇九）

の26～30の歌群のうち、作者表記が認められるのは、26の一首のみで、残りの四首はいずれも、作者表記を欠いている。そこで、これらの五首の作者について検討してみると、この歌群はいずれも『身延のみちの記』（寛文三年版本）の六・一一・一四・一七・三三番に収録をみているので、これらの五首はすべて元政の詠作と認定されるのである。

したがって、この玄旨と元政の事例から援用して、作者名不記の詠歌の作者を想定するならば、本集に作者表記が欠落している詠歌の場合、その直前に付されている作者が当該歌の作者である、と認定することは許されるであろう。つまり、本集の作者注記に関しては、勅撰集に適用されているのと同様の方法が採用されている、と認められるのではなからうか。

このような認識に立って、本集に五首以上収載されている詠歌作者を、整理、一覧するならば、次の（表）のご

とくさろう。

(表) 五首以上の収載歌人一覧表

| 作者 | 歌数 |
|-------------|------|
| 常縁 | 四六首 |
| 玄旨 | 四三首 |
| 読人不知 | 三五首 |
| 成淳 | 二二首 |
| 柯求 | 一九首 |
| 勝敝 | 一七首 |
| 有益 | 一六首 |
| 貞辰 | 一六首 |
| 真基 | 一五首 |
| 俊経 | 一五首 |
| 沢庵 | 一四首 |
| 直昌 | 一二首 |
| 作者 | 歌数 |
| 長之 | 一〇首 |
| 一五 | 九首 |
| 三柳 | 九首 |
| 清賢 | 九首 |
| 佳平 | 八首 |
| 義陳 | 八首 |
| 等和 | 八首 |
| 為昌 | 七首 |
| 惟足 | 七首 |
| 栄貞 (越後住) | 七首 |
| 春涛 | 七首 |
| 隆鎮 | 七首 |
| 作者 | 歌数 |
| 詠之 | 六首 |
| 元政 (深草) | 六首 |
| 鎮喬 | 六首 |
| 保潔 (史邦) | 六首 |
| 頼永 | 六首 |
| 重昌 | 五首 |
| 政通 | 五首 |
| 忠欽 | 五首 |
| 鎮休 | 五首 |
| 方円 | 五首 |
| 合計 | 四二一首 |

この整理によって、本集に収載される六百四十五首のうち、六十五・三パーセントの詠歌作者が五首以上の収載歌人と知られるが、その詠歌作者のほとんどが未知の歌人である実態は、残念としか言いようがない。ちなみに、和歌関係の事典・辞書類にその事蹟が掲載されている歌人について、略歴を示しておこう。

常縁 東氏。応永八年(一四〇二)～文明十六年(一四八四)、八十四歳。室町期の武人・歌人。美濃郡上の領主。古今伝授の創始者。

玄旨 細川氏。幽齋。天文三年（一五三四）～慶長十五年（一六一〇）八月、七十七歳。安土桃山期の武人・歌人・連歌師。田辺城主。三条西実枝から古今伝授を受ける。

貞辰 萩原宗固。元禄十六年（一七〇三）～天明四年（一七八四）五月、八十二歳。江戸期歌人。烏丸光榮らに学んだ堂上派。

沢庵 但馬国山名氏の家臣の生まれ。天正元年（一五七三）～正保二年（一六四五）十二月、七十三歳。桃山・江戸期の歌人。臨濟宗大徳寺の僧。

元政 俗姓菅原氏。元和九年（一六二三）～寛文八年（一六六八）二月、四十六歳。江戸期の歌人。彦根侯井伊直孝に仕え、文武に励む。出家後、京都伏見深草に日蓮宗瑞光寺を開く。

惟足 吉川氏。元和二年（一六一六）～元禄七年（一六九四）十一月、七十九歳。江戸期神道家・歌人。後年、幕府に仕える。

頼之 遠山氏。生没年未詳。江戸期歌人。

政通 鷹司氏。寛政元年（一七八九）～明治元年（一八六八）、八十歳。江戸期歌人。孝明天皇の摂政となり、朝廷と幕府の交渉にあたる。

以上の九人が和歌関係の事典類に見出される人物だが、このうち、「政通」は本集の人物とは同姓別人と憶測されようか。そのようなわけで、本集の詠歌作者のうち、未知の人物が大半をしめるけれども、そのほかの本集の未知の人物などについては、実は、坂将曹静山（一六六五～一七四七）編『和歌山水』の「作者大略目録」に姓と通称を記した簡略な言及があるので、以下には、取り敢えず四首以下の歌人も一括して列举して、この問題に言及していこうと思う。

〔四首収載歌人〕 元就・杉山・辰政・宗茂・多門氏女・利永

〔三首収載歌人〕

安適・義一・久孝・金之・欽之・広矩・幸政・氏康（北条）・重之・瑞幸・政候・全之・宗

元・宗祇・宗川・梅之・扮之・鳳山・茂道・勇道・柳之・柳女（鎮蕎妻）

〔三首収載歌人〕

安当・映豊・佳豊・関之・貴範・義政・義封・久茂・蕎之・景長・山之・氏郷（蒲生）・重

共・重広・重常・順之（光淳女）・信玄（晴信）・正州・成長・政信・政凭・宗好・怠念（斎藤入道）・致

朋・竹之・忠隆・直治・保躬・利香

〔一首収載歌人〕

安昌・惟恒・一輝・一乗・一平・員徒・永井能登守室・永律・演之・可春・可豊・菅雄・貴

和・義重・義智・菊吸（越後）・菊子・久恒・吟之・堅桃・玄寛・光次・光淳・幸子・侍豊・重元・重時・

俊普・升時・昭重・勝英・勝之・勝忠・勝澄・信盛・信美・楨之（隼人正妻）・深之・水雲（越後）・正

盛・成直（光淳父）・政一・政慶・政宗（仙台）・政道・静林法師・仙寿院・素空・単嶺法師・治昌・忠

欽・忠村・長敬・長江・直房・貞子・貞勝・藤ヶ枝・道虎・道寿・梅之女・眠鷗（越後住）・重晴・唯恒・

遊女東路・友直・頼方・了尋・蘆吹

これらの人物のうち、和歌事典類などにその名の登場する者を掲げるならば、およそ次のとおりである。

元就 毛利氏。明応六年（一四九七）～元亀二年（一五七二）六月、七十五歳。戦国期の歌人・武人。中国地

方一帯を勢力下におく戦国大名。

氏康 北条氏。永正十二年（一五一五）～元亀二年（一五七二）十月、五十七歳。戦国期の武人・歌人。関東

の覇権を掌握した。

宗祇 飯尾氏。応永二十八年（一四二二）～文亀二年（一五〇二）七月、八十二歳。室町期の連歌師・歌人。

東常縁から古今伝授を受ける。

氏郷 蒲生氏。弘治二年（一五五六）～文禄四年（一五九五）、四十歳。安土桃山期の武人・歌人。近江国蒲

生郡日野城主蒲生賢秀の長男。

宗好 岡本氏。生年未詳、延宝九年（一六八一）四月、ほぼ七十二歳。江戸期歌人。松永貞徳から古今集の秘伝を受ける。

菅雄 河瀬氏。正保四年（一六四七）〜享保十年（一七二五）二月、七十九歳。飛鳥井雅章の門弟。

信玄 竹田氏。晴信。大永元年（一五二二）〜天正元年（一五七三）四月、五十三歳。戦国期の武人・歌人。甲斐国の戦国大名。

政宗 伊達氏十七世。永禄十年（一五六七）〜寛永十三年（一六三六）五月、七十歳。江戸期歌人。初代仙台藩主。

本集に収載される四首以下の収載歌人では、以上の八人が人口に膾炙した文化人と一応、認められようが、それにしても、本集に収載される詠歌作者のうちの大半が、動向不詳の人物である点については、すでに言及したとおりで不思議だが、以下には、前述の『和歌山下水』にその名が見える人物の情報を提供して、本集の詠歌作者の事態を少しでも明らかにするうえでの手掛りにしたいと思う。ただし、ここには『和歌山下水』の「作者大略目録」に掲げる九十九名全員の名を掲げることにはしよう。

作者大略目録

| | | | | |
|---------|------|-------------------------|----------|--------|
| 常縁東野州 | 玄旨細川 | 信玄武田晴信 | 元就大江 | 政宗伊達 |
| 沢庵大徳寺 | 氏郷蒲生 | 氏康北条 | 一輝堀田河内守 | 一平河内守男 |
| 元政深草 | 三柳中山 | 友益渡辺 | 宗好岡本 | 等和中野 |
| 惟足吉川 | 柯求杉若 | 宗川清水 | 宗茂宗川子 | 政一小堀遠州 |
| 鎮喬河尻与四郡 | 安適原氏 | 忠圃 ^(ママ) 吉益玄忠 | 隆鎮河尻八郎衛門 | 玄圃多門伝八 |

| | | | | |
|-----------|------------------|------------------|------------------|---------|
| 茂道玉虫甚之助 | 鎮休榊原藤助 | 忠隆水嶋伊兵衛 | 保潔根津直宿 | 一五鈴木金平 |
| 政候諸星藤兵衛 | 直昌小木藤兵衛 | 可豐中根斎宮 | 忠欽水嶋伝左衛門 | 鳳山権律師日亮 |
| 勇道宗円寺住 | 模之高力隼人正室 | 広矩太田伊左衛門 | 春濤阿賀允庵 | 長之広矩妻 |
| 清賢片柳郷左衛門 | 唯恒高津七郎兵衛 | 保躬長岡七郎大夫 | 貴範橋詰瑞養 | 柳女鎮喬室 |
| 勝敵大竹長左衛門 | 宗元三善氏 | 佳豐市川久次郎 | 利永青山藤十郎 | 佳平市川万五郎 |
| 景長大久保与十郎 | 貞辰萩原亦三郎 | 幸政伴久米之助 | 頼永遠山平衛門 | 義陳猪谷兵衛門 |
| 一乗猪子弥市郎 | 栄貞 相沢権衛門 越後柿崎 | 政通 原新左衛門 相模之住 | 為昌兼松甚蔵濃州之住 | 真基武井半穴 |
| 政朋田中丹次 | 順之光淳女 | 成淳服部文蔵 | 俊経 小森仁兵衛 筑前之住 | 詠之田中檢校 |
| 直治酒井六郎左衛門 | 粉之允庵妻 | 忠村興津平太 | 演之甲州善光寺住 | 杉山檢校 |
| 藤枝直治妻 | 勝澄戸田彦助 | 眠鷗越後住 | 源之勝澄妻 | 重広吉田典膳 |
| 義封射盛文吾 | 利香 臼田喜平次 濃州住 | 成長間瀬平助 | 忠曠岡田半次郎 | 全之越後柏崎住 |
| 久茂竹内数馬 | 玄寛松井太郎衛門 | 宗祇種玉庵 | 柳之松平大学頭殿家女 | 金之柳之同 |
| 梅之同 | 鈴之同 | 関之同 | 山之同 | 竹之同 |
| 政凭久保田佐助 | 映豊河村太衛門 | 正州田中平蔵 | 勝忠井田嘉藤次 | 義一大内又市郎 |
| 杉之中村交安妻 | 信美小倉源之進 | 瑞幸吉祥珍平 | 喬之加藤久次郎室 | |

以上、『和歌山水』から、本集の収載歌人のうち、姓と通称を記した個人情報を提供したが、実は、この「作者大略目録」が本集の詠歌作者のすべてを網羅しているわけではないことを断っておかねばなるまい。

ところで、本集の「名家拾葉集」なる書目の「名家」について、手許の『日本国語大辞典第十九卷』（昭和五一・小学館）によつて検索すると、

①名望のある家柄。昔から有名な家筋。名門。

②公卿（くぎょう）の家格の一つ。文筆を主とし、弁官を経、藏人をかね、大納言まで昇進できる家柄。羽林家（うりんけ）の下、諸大夫家（しよだいぶけ）の上に位する。日野・広橋・烏丸・柳原・竹屋・裏松（以上日野流という）、葉室・勸修寺・万里小路・清閑寺・中御門・小川坊城・甘露寺（以上甘露寺という）などの諸家の称。

③その道にすぐれた人。名声の高い人。名人。

④中国諸子百家の一つ。春秋戦国時代、名実を正し、是非を明らかにし、法術・権勢を重んじた学派。公孫龍子・恵施など。名（めい）。

のごとく定義されている。このうち、本集の書目にかかわりがあると考慮されるのは、①・③の場合であろうことは間違いなく、本集と②・④の関係は皆無といつてよからうか。

そこで、不十分ながら、さきに検討した本集の収載歌人について、その「名家」の内実について、分類、整理を試みてみると、おおよそ次のごとく種別できるようである。

その第一は、武家歌人であろう。そこで「武家」の謂を『国語大辞典』（昭和一二・一二、小学館）によつて確認しておく、「①武士の家筋。武門。また、中世以降の幕府・將軍家、およびそれに仕える守護、地頭、御家人以下の一般の武士の総称。武士。②室町時代、特に、幕府あるいは將軍家をいう。」となるが、この定義に従つて本集の歌人のうち、該当者を収載歌数の多い順に列挙してみると、次のとおりである。

常縁・玄旨・元就・氏康・氏郷・信玄・政宗・宗川・一輝

なお、本集には女性の歌人の名もみえ、「遊女東路」(四七五)の例も存するが、「永井能登守室」(八)の事例が武家の妻であることからいえば、

多門氏女・柳之・菊子・楨之(高力隼人正妻)・幸子・仙寿院・貞子
などは、あるいは武家の妻の可能性が少なくないであろう。

次に、本集の収載歌人のうち、多く見られるのが、次のごとき僧侶歌人ではなからうか。

沢庵・元政(深草)・静林法師・永律法師・演之・桑門了寿・単嶺法師・全之(越後柏崎住僧)・斎藤入道慈念・鳳山・勇道

そのほか、本集には「惟足」「重広」「信盛」「信美」「貞勝」などの神官、「直昌」「惟恒」などの医家、「梅之」「杉山」などの検校、「貞辰」「宗祇」「頼永」「菅雄」などをはじめとする歌人・連歌師のほか、「保潔」などの俳諧師が見出されるなか、「読人不知」の歌も三十五首に及んでいる。

これを要するに、本集の収載歌人の「名家」の実態については、その大半が素姓が分明でないうえ、読人不知歌も多い点などから十二分に明確にしえないけれども、現時点で分明になった知見からいえば、その名家の多くは武家の出自であり、それに僧侶、神官、医家、検校などの職能が続くなか、名家の実態が正確に把握られない歌人・連歌師・俳諧師が陸続すると要約できるであろうか。

五 編纂目的と成立などの問題

以上、歌題の問題、詠歌作者の問題などについて言及してきたが、それでは、本集はいかなる目的で編纂され、どのようなプロセスを経て成立したのか。次に、このような問題について検討してみたいと思う。

まず、本集の編纂目的については、さいわいなことに、本集の巻頭に「樸塢」なる人物によって記された序文が掲載されているので、以下に、それを引用して、その手掛りを得ようと思う。

からくにのひじりの、たまひけむ「かくれたるよりあらはなるはあらじ」といへる、いとくめでたき言葉になむ。あめつちにありとあるよろづのことわりにかけて、つゆたがふまじくおぼゆ。ちかくこのふみを梓になせしも、さらにそのこゝろばへにぞありける。難波潟しげきあし辺に、ちひさき家をつくりてかくれすむ翁の、あくまでねぢけたるこゝろならひに、今の世のすきぐしきかたをばふつに思ひたへて、ひたぶるいにしへのみやびわざにのみ心をよするありけり。

おのれとし比、うらなくまじらひて、日は日とも、夜は夜ともかたりくらし、かたりあかしけるが、この翁世にめでたきものをひめになり。この年月ふかくひめておほやけにすることをいなみけるに、からうじてたばかりおほせて、つひに世に広うせしは、むかし奥平の君のかきおき、しるしおけるなりけり。これかのひじりの言葉になむ。

寛政十二年十一月

つ の くに 樸塢 謹述

すなわち、この序文において「樸塢」が言うことには、かれの懇意な翁の中に、「難波潟しげきあし辺に、ちひさき家をつくりてかくれすむ翁」がいて、その翁は常に、「いにしへのみやびわざにのみ心をよする」風流人であったが、秘宝ともいうべき「世にめでたきものをひめ」ていたのであった。その翁とここ数年来、「うらなくまじらひて」いるうちに、翁は心を開いて「この年月ふかくひめて、おほやけにすることをいなみける」逸品（めでたきもの）を、公開してくれたのであった。その「つひに世に広うせしは、むかし奥平の君のかきおき、しるしおける」、当面の『名家拾葉集』であったというわけだ。

ところで、この「翁」が誰であるのか目下、その素姓を明らかにしえないのは残念だが、「奥平の君」というのは、憶測すれば、三河国奥平に居住し、信昌の時に徳川家康に仕えて諸侯に列せられ、関ヶ原の戦いの後、美濃加

納城十萬石を賜り、その後、下野宇都宮、下総古河、出羽山形などに転封、享保二年（一七一七）、昌茂のとき、豊前中津城十萬石を領するに至った奥平氏族に連なる者ではなからうか。その奥平氏のなかで当該人物を憶測するならば、次の奥平昌高がその候補となるであろうか。ここで奥平昌高の事蹟を近時刊行された、竹内誠他編『日本近世人物事典』（平成二二・一二、吉川弘文館）によって紹介すれば、

おくだいらまさたか 奥平昌高 一七八一―一八五五 江戸時代後期の豊前国中津藩主。天明元年（一七八一）十一月四日、鹿兒島藩主島津重豪の次男として江戸に生れ、中津藩主奥平昌男の養嗣子となった。幼名富之進、九八郎、のち左衛門尉と改め豊海と号した。同六年九月、昌男の遺領を相続。寛政六年（一七九四）従五位下大膳大夫に叙任、のち従四位下に昇叙、文化十四年（一八一七）溜詰格侍従、同年九月溜詰となって、文政八年（一八二五）家督を子昌暢に譲った。生来資質賢明で、文武稽古場「進修館」を設けて士風の刷新をはかり、河川・道路を修繕して治績大に上がった。みずから国学・洋学に心を傾け、渡辺重名に国書・歌道を学び、文政二年鷹の歌百首を詠じて、『千代の古道』と題した。また、特に蘭学に深く傾倒し、和欄辞書を神谷源内に編纂させ、シーボルト東上の節は、親しく教えを受けた。安政二年（一八五五）六月十日、江戸邸に没す。七十五歳。品川東海寺清光院に葬った。

（芳 即正）

のとおりだが、かれは歌道にも精進し、『千代の古道』なる歌集も編んでいる。

ただし、この人物がこの序文の「翁」のいう「奥平の君」である証拠はない。しかし、榎塙の言によれば、この「翁」が所持していた、「奥平の君のかきおき、しるしおける」「このふみ」——『名家拾葉集』——を「梓になせし」ことは、中国の昔の聖人が言ったとかいう、「かくれたるよりあらはなるはあらじ」なる格言の具現化に相当する営為となって、本集の出版はすなわち、「そのころばへにぞありける」行為にほかならなかったというわけだ。ここに本書の刊行目的が窺知され、それは「かのひじりの言葉」の体現化ともいえるべき意味をもつのであって、

その点、この序文の記述から窺知される内容は、本集の編纂目的とは性格を異にする出版意図に属する種類のものだと言わねばなるまい。ここに本集の属性が認められ、それは本集が通常の類題・私撰集とは異質の歌集であることの表明、宣言であると言えようか。とはいえ翻っているならば、本集の上梓が結果的には、ユニークな類題・私撰集の出現につながっていることだけは間違いあるまい。

それでは、序文の執筆者である「つのくに 榎塙」とはいかなる人物であろうか。ちなみに、『和学者総覧』（平成三・一、汲古書院）によれば、「榎塙」なる人物は見当たらないが、「梅塙」なる者が次の三箇所に掲載されている。

1542 上野梅塙 〔称〕榮次 〔字〕子緝 〔名〕熙 大阪 明治42・9・3 78 書家

4236 五井純禎 〔称〕藤九郎 〔字〕子祥 〔号〕蘭洲・洌庵・梅塙 大阪 宝暦12・3・17 66 五井守任三子、懷徳堂

教授、津輕藩に仕

9395 前田宗辰 〔称〕勝丸・犬千代丸・又左衛門・佐渡守・加賀守 〔字〕伯拱 〔名〕利勝 〔号〕梅塙・皓然斎・闇章堂

〔諡〕大応公 加賀金沢 延享3・12・12 54 加賀藩主

このうち、上野梅塙は寛政十二年には誕生しておらず、五井純禎は同年には生存していない点で、また前田宗辰は活動の拠点が「なには」ではなく、加賀金沢である点からいって、いずれも本集の序文の執筆者たる「榎塙」に該当する条件を満たしていないようである。ということは、本集の共同編者とも想定しうる「奥平の君」・「榎塙」なる人物の事蹟は、現時点では未詳というほかはあるまい。

次に、本集の成立の問題に言及するならば、すでに触れたように、本集には巻頭に「榎塙」なる人物の序文があつて、そこに「寛政十二年十一月」とその執筆時期が銘記されているので、本集が寛政十二年（一八〇〇）十一月までに成立していたことは疑いもなく、ここに本年月を本集の成立時期と認定することができるであろう。

ちなみに、本集の巻末には「寛政十二年申十二月」なる刊記が存するので、本集の刊行年月を寛政十二年十二月

と規定することができるであろう。

以上、『名家拾葉集』を額面どおり、純正な類題私撰集と認定して、当該歌集の序・刊記などの書誌的情報に基づいて、かなり詳細に論述してきたのだが、実は、その後の検討の結果、本集は、坂静山編『和歌山水』のうち、一部を省略した形の、完全な盗作、復刻版であることが判明したのだ。その一部とは、同集（『近世和歌撰集集成 第一巻』昭和六〇・四、明治書院）の卷之六「哀傷」の

十首哥の中に待恋

氏康

467 明るまで待てや見まし時のまに かはるこゝろの又や替ると
の詠から、卷之七「恋哥上」の

秋恋を

よみ人しらす

513 秋の風野辺の草木はしほとも たのめし中にふかすもあらなん
の詠までの四十七首と、卷之十二「祝言」の「柏木全故亭にて『子日催興』といふことを」の詞書に関わる「良照」の例歌（証歌）に相当する、

693 むれつ、もけふは初子の姫子松 ひくてに千代の春をかさねん
の詠から、同卷同部の

題しらす

佳豊

702 時は今くもりなき世にすみわたる 月もこゝろのまゝの継橋

の詠の十首に加えて、「追加」の詠歌（七〇三〜七二三）の二十一首の都合七十八首が相当するわけである。これを要するに、『和歌山水』の体裁で版行したにもかかわらず、書目名のみは「名家拾葉集」として刊行されたのが、『名家拾葉集』なる類題私撰集であるわけだ。

ちなみに、『和歌山水』について概略するならば、

坂静山（光淳）編。十二卷三冊。自序と門人・吉益玄忠（享保十七年）の跋をもつ。京都上坂勘兵衛刊。序と跋文によれば、宝永七年（一七一〇）に『和歌繼塵集』を版行した後、古歌および当代歌による類題集を編んだという。総歌数七百二十三首。巻末に「作者大略目録」を掲げ、九十九名の姓と通称に及んでいる。

のとおりである。また、編者の坂静山については、上野洋三氏の知見を、『日本古典文学大辞典第五卷』（昭和五九・一〇、岩波書店）から引用しておこう。

坂静山 いはんせ江戸時代の歌人。名は初め常淳、後に光淳。通称幸助、また将曹。静山は号。寛文五年（一六六五）正月十日尾張愛知郡に生まれ、尾張徳川家の庶流に仕えたというが、浪人して江戸の大隅町などに住み、延享四年（一七四七）九月二十六日没、八十三歳（墓碣）。江戸市谷の禅慶寺に葬る。【事蹟】烏丸光雄の門人。

宝永七年（一七一〇）に『和歌繼塵集』を、享保十七年（一七三二）に『和歌山水』を、元文四年（一七三九）に『和歌和泉杣』を編集刊行した。いずれも近世同時代の江戸歌壇を知るための好資料である。（後略）

以上から『名家拾葉集』の実際上の成立の問題に言及するならば、本集は享保十七年（一七三二）初夏に、坂静山によって編纂され、同年中に版本として刊行された、その著作に関わる諸事象が本集の実質上のすべてであると規定されるであろう。なお、坂静山編『和歌山水』がおよそ三十年後に、『名家拾葉集』なる書目の名を付して盗作、復刻された問題などについては、改めて検討を加えなければなるまいが、それらの諸問題については他日を期したいと思う。

最後に、本集の近世類題集における位相に言及するならば、本集に陸続する類題集として、文化九年（一八一二）に刊行された高井八穂・榛原保人編『類題名家和歌集』三卷三冊を指摘することができる程度である。ちなみに、『類題名家和歌集』は、常縁・宗祇・長嘯子など室町後期から江戸初期ころまでの約五十人の歌人になる詠歌を類

題したもので、その成立過程に言及すれば、高井八穂・榛原保人が高井宣風の蒐集していたものを、四季・恋・雑部のもとに題ごとに類題して再編して、文化九年に上梓されたもので、宣風の子・高井八穂と榛原保人の序文が巻頭に掲げられている。

六 まとめ

以上、『名家拾葉集』について、種々様々な視点から基礎的考察を加えてきたが、ここでこれまでの検討をとおして得られた結果を摘記して、本稿の一応の結論にしたいと思う。

(一) 『名家拾葉集』の伝本は現在、大阪市立大学学術情報総合センター森文庫蔵にかかる版本二冊が唯一のものである。

(二) 本集は総丁数六十三丁（上册・二十九丁、下冊三十四丁）を数え、春百五首、夏七十五首、秋百二十四首、冬八十五首、錢別・羈旅三十八首、哀傷二十二首、恋上二十七首、恋下三十九首、雑上六十一首、雑下三十七首、神祇十七首、祝言十五首の、都合六百四十五首を収載する小規模の類題私撰集である。

(三) 本集に集録される歌題は、百首歌と歌題集成書のモデルである『堀河百首』『和歌題林抄』と比較すると、ほぼ重なるものの一部に未収録の歌題が指摘される。

(四) 本集に収載される詠歌作者の六十五・三パーセントは、五首以上の収載歌人によって占められているが、そのうち、上位十人は常縁・玄旨（幽斎）・読人不知・成淳・柯求・勝敵・有益・貞辰・真基・俊経のおりである。

(五) 本集の書名となっている『名家拾葉集』の「名家」の実態については、現時点では充分明確にしえないが、

その多くは武家の出自であり、それに僧侶、神官、医家、検校の職能が続くなか、歌人・連歌師などの名がめだつ程度である。

(六) 本集の編纂目的は「楳塙」の序文によれば、中国の昔の聖人の格言の具現化の意味を担っており、「楳塙」と親交のあった「翁」が「世にめでたきものをひめにた」る「ふみを梓になせし」ものが『名家拾葉集』であって、それは「奥平の君のかきおき、しるしおける」歌集であったわけだ。

(七) 本集の共編者ともいうべき「奥平の君」も「楳塙」も現時点では、その素姓を明確にすることはできない。

(八) 本集の成立時期は、文政十二年（一八〇〇）十一月、その刊行年時は同十二月と規定できるであろう。

(九) 本集の近世類題集における位相についてあえて言えば、文化九年（一八一二）に上梓された高井八穂・榛

原保人編『類題名家和歌集』（三卷三冊）の先蹤をなす類題私撰集と位置づけられるであろうか。

(十) なお、本集は実は、坂静山編『和歌山下水』の復刻版である実態が判明したので、本集の実質上の編者は坂静山、成立は享保十七年（一七三二）初夏、刊行年は同年中となることを言い添えておく。

なお、本集について検討しなければならない喫緊の問題は、『和歌山下水』と『名家拾葉集』の関係を中核とした版行上の考察であろうが、ともあれ一応の基礎的考察を終えたいまは、それらの残された問題は今後の課題にすることにして、このあたりでひとまず、蕪雑な作業報告の筆を措くことにしたいと思う。